

2学年大学見学会レポート(文系)

6月21日(火)、国立大学の見学に行ってきました。各々が希望するコースに別れて、11の大学を訪問し、施設見学や模擬授業の機会をいただきました。以下にその感想をまとめましたので、他コースの大学についても情報を得て、進路選択の参考にして下さい。

茨城県立下館第一高等学校
第2学年進路指導部
平成28年7月4日発行

一橋大学

・施設の紹介や学部の説明を、現役の学生の方にしていただいた。実際に通っているからこそ分かる「今」の情報をたくさん知ることができた。特に印象に残っていることは、留学する人が多くいることだ。一橋大学では留学するにあたって、大学側からお金の援助を受けられるそう。そのため、留学をする人が多く、実際に施設見学している間にもたくさんの外国人留学生を見かけた。自分も留学に興味があるので、留学の活動が活発な大学を見学できてよかった。(2組 佐藤 ルナ)
・大学内を案内・説明して下さった学生の方は、「他学部の授業を受講することが可能なので、自分はそうしている」と話していた。自分がこれと決めた道があっても、在学中他にも興味が出るかもしれない。学部数は少ないが、このような制度があるのは魅力の1つであると感じた。(4組 新井 千紘)



埼玉大学

・埼玉大学には、教養学部、経済学部、教育学部、理学部、工学部の5つの学部があり、1つのキャンパスに集約されている。自分はその中で、教養学部を見学した。卒業後の進路は様々で、公務員や金融・保険業と幅広い。今回の見学で、自分は教養学部の高橋克也教授の模擬授業を受けた。テーマは「仏教と戦争ー日本近代史からのいくつかの教訓」というもので、今の自分にとってとても難しい内容だったが、1つ印象に残った言葉がある。それは、「功德を積むということは功德を積まないことだ」というものだ。言葉だけを聞くとよく分からなかったが、簡単に言うと「良いことをしたと思っていたら、それは良いことをしたということではない。本当に良いことをしている人は良いことだと思ってやっていない。だからすばらしいのだ。」ということだ。授業の内容はとても難しかったが、この言葉はこれからの人生に役立つと思った。改めて高校と大学の授業は違うなと感じた。(4組 角谷 祐二)
・英語教育の環境が恵まれているということが、まず印象に残った。スピーキングルームで声を出して英文を読んだり、単語の発音やアクセントの練習ができる。また、TOEICの点数でクラスが分けられるため、自分のレベルに合った勉強ができる。基本的に就職先は公務員が多かった。埼玉大学の学生を見て、やっぱり大学生活は楽しそうだと期待が膨らんだ。ネットで調べても載っていない情報がたくさんあるので、興味を持った大学にはオープンキャンパス等の機会を利用し積極的に行った方がよいと思った。(3組 日向野 聡志)



高崎経済大学

・地域政策学部を見学しました。講義を受けて、世の中の問題のほとんどは経済の問題だと知った時に、あまりピンときませんでした。これは、自分が世の中のことに目を向けていないということだと思えます。このことを良い機会とし、これからはニュースを見たり、新聞を読んだり、少しでも経済について勉強しようと思えます。(1組 松山 智華)
・地域政策学部の説明の際、学部長である佐藤公俊先生が、「将来、地元に戻るか戻らないかはどちらでもよいが、自分の地域を絶対視せず、一度外に出て客観視することで、未来の姿が見えてくる」と仰っていました。その言葉を聞いてなるほどと思うと同時に、幼い頃から住んでいる地元について何も知らない自分と地域の関係性について考えさせられました。高経大も、世界を視野に入れた教育を行っています。主に英語教育と留学サポートが充実していて、e-ラーニングの積極的な活用、TOEIC受験に力を入れているそうです。この、世界と結びつけた教育も、「地域を外側から見て、より地元を理解する」とことにつながっているのではないかと思います。(4組 廣岡 真依)



首都大学

・自由見学だったため、施設をまわって見学しました。しかし、説明で聞いたように、東京ドーム9個分もある広さの敷地を1時間で全てまわることはできなかったのも、少し残念でした。外からでしたが、生徒さんたちが真剣に講義を受けている様子を見ることができました。吹奏楽部らしき人たちが練習しているのを見ることもできてよかったです。今回の大学見学で、実際に行かなければ分からないことを知ることができました。オープンキャンパスなどを利用して、実際に大学に足を運びたいと思います。(1組 小林明日香)
・4つの学部があり、それぞれが様々なコースに分かれていて、多くの分野を学べることが分かりました。また、首都大では、他コースの科目も履修できるので、コースの垣根を越えた教育を受けることができることも分かりました。いろいろな知識を取り入れ、自分の専門のものに生かせる、良いプログラムだなと思いました。(3組 高田 竜之介)



千葉大学

・大学を訪問して特に印象に残ったことは、どの大学もグローバル化に対応するため英語に力を入れ始めているということだ。2次試験では英語を使うという大学も増え続けている。英語を勉強しなければならぬと思うと同時に、それ以外のプラスα的なものも養おうと思った。千葉大の先生は、「新聞を読みなさい。」と言っていた。新聞を読むことで世の中の動きが分かり、自分を磨くための手助けになると仰っていた。一番印象に残った言葉が、「教育者たるものが世の中の動きを知らずに、どうして子どもを教えることができるかい？」だ。この言葉は大切にしようと思った。(2組 鈴木 開登)
・今回の千葉大見学では、大学のことだけでなく、これからの進路を選択していく上でのポイントも学んだ。まず、進路選択に必要なことは、大学の、その先を見据えて考える、ということである。社会は目まぐるしく変化している。その中でどのような職種を選んだらよいか、どのような会社に就くべきかは、社会の流れを読まないと分からない。新聞などから、今社会はどのような動きを見せているのかを理解し、職業を選択していくことが必要である。また、社会に出た時必要になるのは、「知識」と問題への柔軟な「対応力」、「解決力」であることも教えていただいた。それらを身につけるためには「経験」はもちろん、「失敗」することも重要になってくる。失敗したときに改善点を見出していくことによって、知識はもちろん、いざ失敗した時に適切な対応をとる力を養えるのだ。(3組 倉持 凜)



群馬大学

・社会情報学部の説明の中で、大学とは、答えのない問題にも取り組める力や、自分で問題を発見する力を養う場所であり、今社会が求めているのもそういう力を持った人材であると教えていただいた。群馬大を訪問して、大学は自分が本当に学びたいと思う学問が学べる場であると改めて感じた。(2組 新井 ひなた)
・印象的だったことは、教育学部の実習は群馬大学では3年次に8週間にわたっておこなわれ、その期間は実習に集中できるような授業形態になっているということだ。実習を多くとることで、自分の考えを実践できるし、反省し次につなげることが何度もあることで、教員を目指す人にとっては、良い実習ができると思った。生徒にどのように教えれば分かってもらえるかを考えると、複雑で難しい。だから、群馬大学では「学びを考える場」を大切に授業をしているのだと思った。(3組 梶川 万里奈)



2学年大学見学会レポート(理系)

東京農工大学

・農・工の2学部体制の大学は日本で一つ、世界でもかなり珍しい。さらに農学部あつての工学部、工学部あつての農学部といった学習をするらしい。広大な敷地に、最先端の設備を持ち、驚くような研究をしている。四季の部屋を作り、1年で2回果実を収穫できるようにする研究は、実現したら素晴らしいと思った。就職先も、明治やメグミルク、ハーゲンダッツなど誰もが知っている大企業が並ぶ。知れば知る程興味が湧くし、憧れも強くなる大学だった。(6組 鷺谷美来)

・農工大を見学して、気がついたことが2つあります。1つは授業を行うときの人数を知ることは大切だということです。説明を聞いて、少人数の授業の方が良い研究ができるということを知りました。2つ目は、工学部は物理学を中心に学んでいるわけではないということです。私は生物学を勉強したいと思っているので、工学部とは無縁だと思っていた、今まで工学部を調べたことはありませんでした。しかし、工学部でも生物学を研究しているところがあると分かったので、理学部や農学部だけでなく、工学部についても調べていきたいと思います。(5組 岡田 琳)



群馬大学桐生キャンパス

・群馬大学理工学部を見学して、理学部と工学部の違いがよく分かりました。理学部は、現象の原因を説明するもので、工学部というのはその現象を利用して生活に生かし、新しいものを作る学部です。例えば砂は水をかけると硬くなるというのに対し、その理由を考えるのが理学部です。その現象を利用してトンネル工事に利用するというのが工学部です。群馬大学はこの2つの学部を融合した理工学部が特徴で、現象と物作りまで学べます。私が「すごい!」と思ったのは燃料電池です。水素ではなくエタノールを燃料にして、エンジンを動かすという研究です。その実用化を目指し、企業からの援助をもらって研究をしているというお話しでした。見たこともないような機材や薬品があり、レベルの高い研究ができそうだと思います。(5組 高松 育美)



前橋工科大学

・最近では大学院に行かなければ会社に雇ってもらえない場合が多くあるらしく、群馬大学同様大学院に進む人が60%以上もいることを知って驚きました。大学内を1周させていただいて、「生物工学」の教室はどれも魅力的で、特に残響室と無響室はとても楽しくわくわくした気持ちが止まりませんでした。実際に大学へ行って、自分の目で見ることによって、雰囲気や施設に関することがよく分かるので、大学見学会はとてもよい経験になりました。(6組 仲見川 花音)

・工学部に属する6つの学科について詳しい説明を受けました。その中で、高校で修得しておくべき科目や、業種別の進路状況が、志望校を決める時の指針になると思いました。説明の後には、大学を案内してもらいました。一人一人が、自分の作業台をもって、学生が熱心に製図をしたり製作をしたりしており、リアルな大学の様子を見ることができました。(7組 上野 弘夢)



東京学芸大学

・学芸大学で模擬授業を受講して思ったのは、自分で学習することと、人に教えることは全く別のものであるということである。私は今まで自分が理解していることは教えることができると思っていたが、実際には、知識の浅い小学生に学習を教えるのはとても難しいことであることに気が付いた。どうすれば理解してもらえるのか、どうすれば分かりやすく教えることができるのかなどを追求するのは面白そうだった。見学を通して、教育という分野への関心が自分の中で高まった。(7組 小泉健人)

・実際に模擬授業を受けてみて、小学生に教えるのは大変なのだと分かった。自分たちがふつうに知っていることを、いろいろな例を使って説明するというものだった。大学の概要や模擬授業の内容から、教育関係の勉強をしたい人にとっては良い大学だと思う。他の大学についても調べてみようと思った。(5組 阿部 百香)



会津大学

・普段何気なく使っているスマートフォンやパソコン、テレビなどの家電製品までもが、すべてプログラミングを利用しているのを知り、興味がわきました。(6組 水越 千尋)

・実際に会津大学に行って分かったことは、今の時代は理系の女子が必要とされている、ということである。今回説明を聞かせてもらったコンピューター理工学は、日々進化していくプログラムの世界に適応し、自学していく力が必要となる。つまり、女性でも十分に活躍していける世界なのだ。私は以前からプログラミングに興味があり、試しに自分でもやってみたりしていた。会津大学は、プログラミング甲子園などのように、私のような高校生もプログラミングを学ぶことのできる機会を設けている。大学生だけでなく、必要な人材を高校生から育てているという印象を受けた。プログラミング世界大会でも優秀な成績を残しており、プログラミングを学ぶことについては、国内でもトップクラスだと私は思う。この大学見学会で、理系女子の必要性やプログラミングの将来性、会津大学の世界規模での活躍がよく分かった。(7組 廣瀬 未侑)

